

徳山下松港のあゆみ ～ ①周南地域発展の礎「徳山港」

江戸時代の徳山

江戸時代、徳山藩ではいわゆる「防長三白」と呼ばれる特産品生産が進み、内陸部では和紙、海沿いでは干拓地で米や塩が作られ、生産物を運ぶための港が整えられました。

富田・徳山・下松などに港が整えられ、徳山の浜崎港は、藩主が参勤に海路を用いる際に利用されたほか、幕末には長州藩を頼った7人の公卿のうち5人が上陸しています。

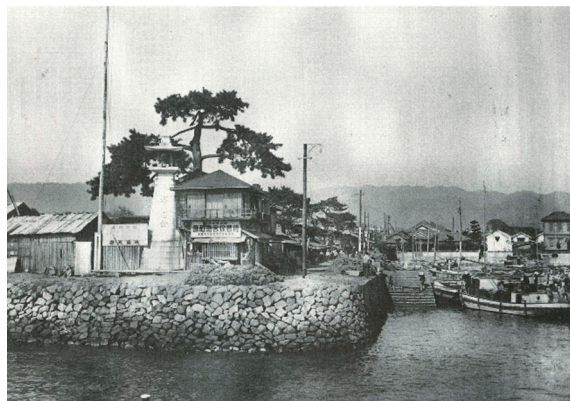
上：寛保2(1742)年頃の徳山 「御国廻御行程記」(部分)
『絵図で見る防長の町と村』 A
下：徳山藩の御座船、大鵬丸 徳山毛利家蔵「御軍役御船建」(部分) B



明治前期の瀬戸内海航路

当時、瀬戸内海航路が物流の中心であり、明治17(1884)年に大阪商船(株)の船舶が徳山や下松に一時期寄港するようになりました。同年、徳山では浅田義一郎ら5名が汽船問屋共栄社を設立しました。購入した第一徳山丸が初入港した際の高揚した様子が伝えられています。

共栄社はその後、大阪～博多間を主要航路として最盛期には9隻を所有するなど航路を拡げ、明治26(1893)年には東浜崎港に「海上安全」と刻まれた石灯台を建てました。



< 第一徳山丸の入港 >

「防長新聞」(『徳山市史資料』所収)より抜粋

明治17年12月20日、徳山市中の人々は早朝より皆々浜崎の埠頭に群集なし、徳山湾に眼を注ぎ着船今やと待ち受けたり。

又海上には最寄最寄に小船を浮べ、あたかも曹操が赤壁に筏を並らべたるが如く、敵兵今や来るの有様なり。

其の乗組の人々は、徳山、遠石或は櫛ヶ浜の若者連にして、時既に午前11時に移りたる頃、汽笛一声忽ち汽船は粕島と大島の間に進入し、風を破り波を蹴り、直ちに浜崎の埠頭に至る。

其時早く此時遅く海陸ともに鯨波をつくり、徳山万歳と呼ぶ声、近山近島に響きて止まざりし。

上：「明治期の東浜崎港」 共栄社が設置した石灯台が写る。 B

下：現在の石灯台 現在は晴海親水公園に移設されている。明治4(1871)年以降、山口県に洋式灯台が普及するなか、県内最後となる和式灯台であるとも言われる。 C

山陽鉄道の開通と徳山

明治30(1897)年9月、山陽鉄道(株)が広島～徳山間を開通させ徳山駅が開業し、徳山から門司へは連絡船が運航されました。

徳山の町は九州との人や物資の往来により、活況を呈しました。

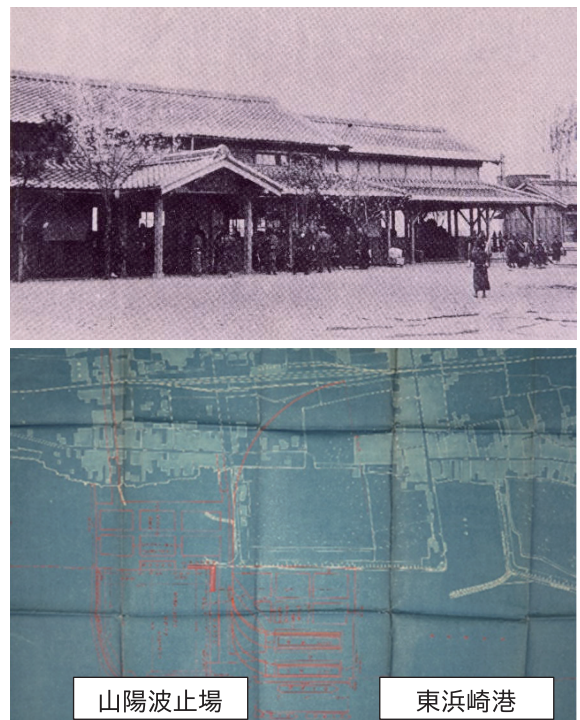
東浜崎港は大阪商船の連絡船(翌年廃航)が利用し、山陽鉄道は汽船会社を設立して新たに波止場(山陽波止場)を築いて連絡船を運航しました。どちらの港も連絡船は接岸できず「はしけ」を利用したため、潮の干満や天候の影響を受けました。

上:「明治期の徳山駅」 B

『山陽鉄道案内』(明治34年発行)には徳山の物産として、「茶、アンチモニー、和紙、酒、生牛」と記されている。

下:「徳山港湾調査書」添付図面(部分) A

大正9年作成。赤線で改修計画が追記されているが、現況として東浜崎港、その西側に山陽波止場が白線で示されている。

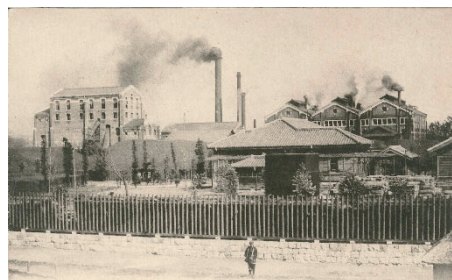


海軍煉炭製造所の誘致

明治34(1901)年に山陽鉄道が下関まで全通すると、徳山は通過駅となり町の活気が失われていきました。

その頃海軍は、輸入に頼る高品質の石炭に代わり煉炭(石炭の粉末を固めたもの)を国産化するため、工場用地を探していました。

徳山町長の野村恒造をはじめ町をあげた熱心な誘致活動の結果、明治37(1904)年に、美祢の炭鉱や、呉・佐世保の軍港に近く、多くの艦船が停泊可能な港がある徳山への建設が決定され、徳山は発展のきっかけを掴みました。



左上と中央:「海軍煉炭製造所」 B

左下:「煉炭(波刻印と錨刻印)」 B

錨刻印の第一種炭、波刻印の第二種炭、桜花刻印の第三種炭が生産された。大正4年には徳山港から約26万トンが出荷されている。

右上:野村恒造胸像 C

当初、徳山公園(現在の徳山動物園周辺)に全身像が建立されたが太平洋戦争中に供出され、昭和34(1959)年に造られた胸像は、現在、周南市役所駐車場に鎮座している。



徳山下松港のあゆみ ～ ②徳山港の開港

工場の進出

大正4(1915)年に神戸の合名会社鈴木商店が亜鉛製錬所の建設に着手し、その後、大阪の(株)岩井商店による大阪鐵板製造(株)徳山分工場や日本曹達工業(株)が相次いで徳山へ進出しました。海軍に加え民間工場が操業を始めたことにより、徳山は工業都市へ変貌を遂げていきました。



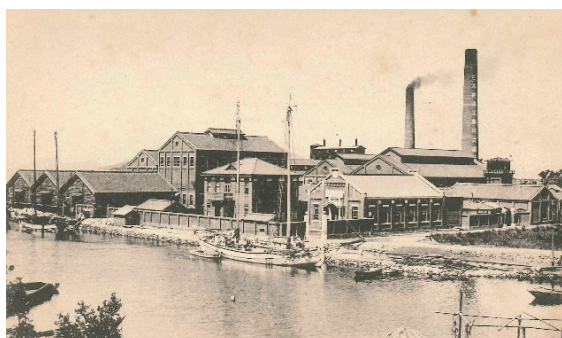
亜鉛製錬所 (→日本金属(株))

神戸の(名)鈴木商店は、第一次世界大戦の戦争景気により多角化を進め、非鉄金属事業に乗り出しました。
大正4(1915)年、下関市彦島には亜鉛精錬工場、徳山にはオーストラリア産亜鉛鉱を輸入して焙焼する工場の建設を始めました。
工場は翌大正5(1916)年に竣工し、同年設立された日本金属(株)徳山製錬所となりました。



大阪鐵板製造(株) (→徳山鐵板等を経て日新製鋼(株)) →現在の日鉄ステンレス(株)山口製造所周南エリア

大阪の(株)岩井商店は、第一次世界大戦による鉄鋼製品の輸入途絶に直面して国産化を目指し、大阪の亜鉛鍍(株)の経営に参画しました。同社は、大正4(1915)年、徳山に薄鋼板圧延を行う分工場の建設を決め、翌大正5(1916)年に社名を大阪鐵板製造(株)と改めました。
徳山分工場は大正7(1918)年に竣工しました。



日本曹達工業(株) (→徳山曹達(株)) →現在の(株)トクヤマ

大阪の(株)岩井商店は、ソーダ灰(炭酸ナトリウム)や苛性ソーダを輸入していましたが、第一次世界大戦により輸入が激減したことから国産化を目指しました。
大正6(1917)年、岩井勝次郎は徳山の塩田跡地などを購入し、翌大正7(1918)年に日本曹達工業(株)を設立、同年11月に工場が完成しました。

<日本金属(株)から帝国石油(株)、旭石油(株)へ>

(名)鈴木商店は、大正7(1918)年に後藤新平の要請で帝国石油(株)の経営を引き受け、大正5(1916)年に買収していた播磨造船所でタンカーの建造をはじめ、石油精製工場の建設に着手しました。
大正10(1921)年、帝国石油(株)は日本金属(株)から徳山製錬所を譲り受けて製油所の建設に着手し、翌大正11(1922)年5月に製油を開始しました。同年に帝国石油(株)は旭石油(株)と合併し、新しく「旭石油(株)」と改称しました。
原油貯蔵タンクなどを整備し、社有栈橋には1万トン級の船舶が係留できました。同社の橘丸・満珠丸・干珠丸などのタンカーが国内や北米、南洋を往復しました。

上：「日本金属株式会社徳山製錬所」『徳山市史』 中：「大阪鐵板製造株式会社」 B 下：「日本曹達工業株式会社」 B

開港に向けた運動

大正5(1916)年、徳山町は国へ「輸出入港特別指定請願」を提出し、その後も請願を繰り返しました。

また、民間においては「徳山開港期成同盟会」が結成され、開港に向け運動を始めました。

進出した工場が原材料となる鉱石や機械類などを海外から輸入していましたが、徳山に税関がなかったため貿易船は門司へ数日入港して手続きが必要となり、産業発展に不都合であったためです。



「大正時代の徳山港」 B

周南地域発展の礎「徳山下松港」

大正10(1921)年に成立したワシントン海軍軍縮条約などが良い影響を与え、大正11(1922)年2月10日、徳山港の開港が決定されました。

徳山開港期成同盟会は、港内の埋立計画を立て、同年6月に徳山開港(株)を設立して丸山助二郎が社長となりました。

急ぎ必要となる税関用地は、徳山開港(株)が造成して町へ寄付することとなりました。

同年12月14日に熊野神社で地鎮祭、翌15日に児玉神社の遷座式に続き、同境内で開港祝賀会が開かれました。埋立地は大正15(1926)年5月に完成し、同年完成した税関支署は町営棧橋の基点近くに置かれました。



左：「門司税関徳山支署」『目でみる徳山の歴史 改訂版』

大正15(1926)年6月に落成。翌昭和2(1927)年に設置された開港記念碑も写る。

右：「開港記念碑」 C

徳山開港(株)社長の丸山助二郎のほか、原敬や床波竹二郎など中央の政治家を含む52人の名前が刻まれている。



左：「徳山町市街図」大正14年(部分) A

当時の海岸線が分かる。開港区域を示す直線が示されている。開港区域内を3区分し、一部には海軍による利用制限があった。

中央：「徳山港棧橋」 C

棧橋の基点に写る建物が税関支署。その隣は水上警察署徳山派出所。

右：「徳山港船溜まり(もと山陽波止場)」 B

徳山開港(株)による埋立のため、山陽波止場は船溜まり程度の面積となった。中央奥に税関支署が写る。

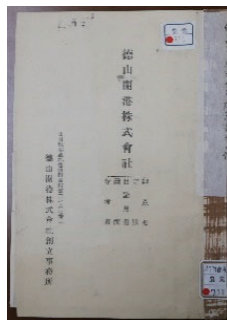


徳山下松港のあゆみ ～ ③開港の実現とまちの変化

徳山開港(株)の構想

丸山助二郎は、徳山港開港にあたり、徳山と国東半島を航路で結び南九州の旅客や物資を徳山と結ぶことや、会社組織を興して港湾と設備を整備し、海陸運送業や不動産業まで含めた臨港地区の開発を行う構想を抱いていました。

「徳山開港株式会社」目論見書及び付図 A
赤線により計画地を示したうえで、青線により第二期計画を示す。鉄道を引き込み、三千トン級船舶の接岸が計画されている。



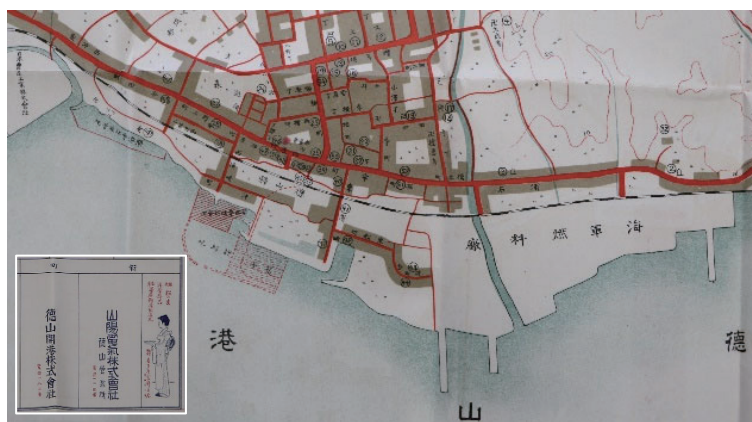
徳山町市街図の一部（大正11(1922)年）

市街地とともに徳山開港(株)による埋立計画が描かれています。

地図裏面の企業広告には、日本曹達工業(株)などとともに徳山開港(株)もあります。

なお、海岸沿いに海軍燃料廠とあるのは、大正10(1921)年に海軍煉炭製造所が拡張改組されたためです。

「徳山町市街図」大正11年（部分） A



<徳山開港(株)社長 丸山助二郎>

大正7(1918)年、日本曹達工業(株)創立にあたり発起人となり、大正10(1921)年まで専務取締役、大正13(1924)年まで取締役や監査役を務めました。

会社経営のかたわら、徳山開港期成同盟会の相談役として、会長の佐伯隆資（徳山で佐伯病院を開業。政友会支部長などを務める。）を助け、町当局に協力して徳山港の開港に尽力しました。

大正11(1922)年6月に徳山開港(株)とともに豊徳運輸社を創立し、大分県国東港との連絡航路を開きました（昭和2年頃まで）。

また、大正13(1924)年の第15回衆議院議員選挙では山口第7区（都濃郡）に政友本党所属として立候補しましたが、長岡外史に敗れています。

その後横浜へ移り、昭和3(1928)年に丸山理化学研究所を起こしてラジウムを研究し、昭和14(1939)年に没しました。



「丸山助二郎」
『徳山市史』

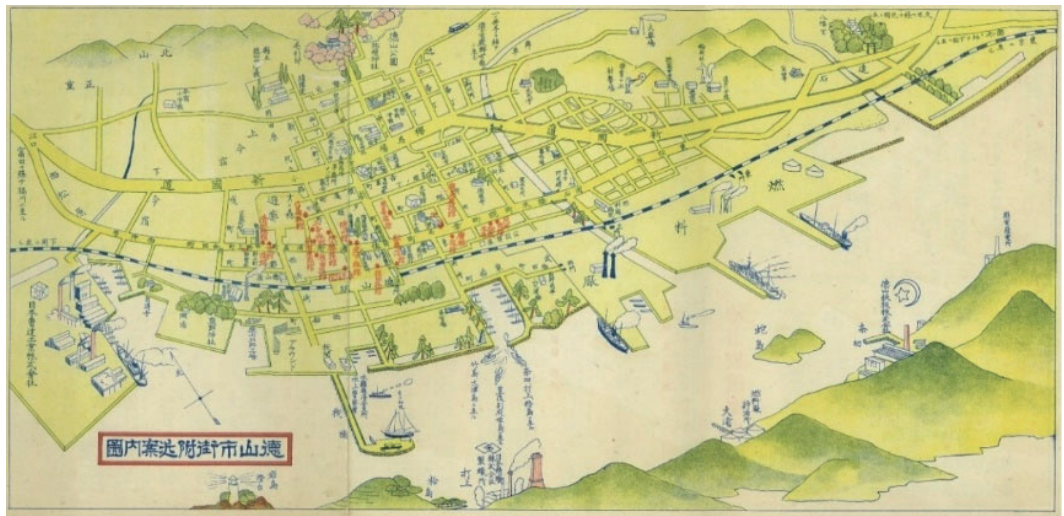
徳山開港(株)の成果

徳山開港(株)の計画が全て実現することはありませんでしたが、港湾の整備を促進し、町民の意識を高揚した功績がありました。

また、開港と同時期に海軍燃料廠をはじめ民間企業が施設の拡張を図ったことから、各会社の専用栈橋を用いた資材や製品の輸出入額は急増し、外国船貿易において大正12(1923)年と昭和8(1933)年を比較すると船数・トン数ともに約3倍となり、入港船舶も大幅に増加しました。

まちの繁栄

昭和7(1932)年頃からの経済界の好況により、昭和10(1935)年に徳山市の発足、岩徳線の開通や幹線道路の整備など、まちの景観も変化が進みました。



上段：「徳山案内」表紙及び案内図 C

昭和9(1934)年頃の様子。海沿いに工場の煙突や栈橋に停泊する船が描かれ、海によって発展するまちの様子が描かれている。

下段左：「徳山海軍大博覧会」 C

昭和9(1934)年に市街3か所を会場として開催。

下段右：「徳山市街の一部」 C

昭和10(1935)年頃の幸町通より佐渡町（現在の銀座周辺）



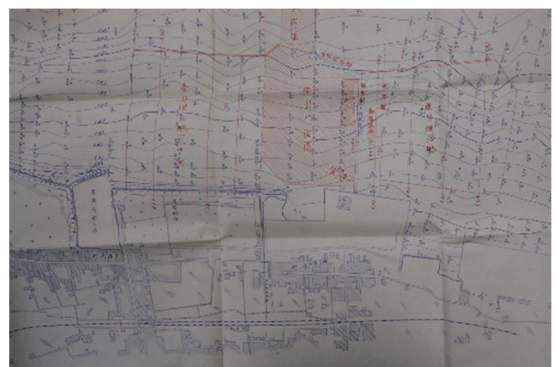
<徳山港修築計画>

開港後、徳山町はさらなる港湾施設整備を目指しました。

町は、昭和7(1932)年に徳山港湾協会を結成して中央協会に加入し、翌昭和8(1933)年、根本的な徳山港修築の設計に着手しました。

昭和10(1935)年の市政施行後は、産業経済の発展に伴い港湾整備の必要性がますます痛感されたことから、徳山港修築促進同盟会を結成して運動を始めました。

設計を終えていた修築計画は、国防上の見地や交通機関の発達を踏まえて変更を加え「徳山港修築計画概要」として昭和12(1937)年に報告されました。

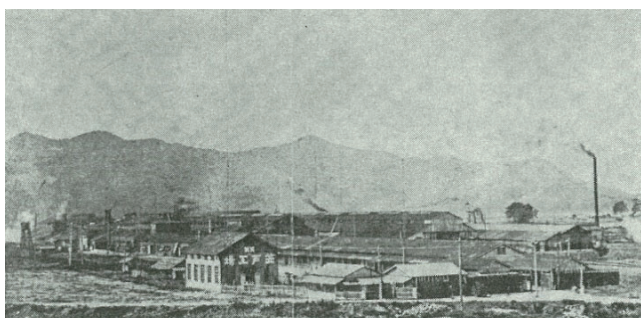


「徳山港修築計画図」付図(部分) A

徳山下松港のあゆみ ～ ④工業都市へ（大正～昭和初期）

工場の進出（下松）

明治末の第一次塩業整理によって生まれた塩田跡地に着目した久原房之介は、大正6（1917）年に「下松大工業都市建設計画」を発表して用地取得を進めました。まもなく計画は中止されましたが、大正6（1917）年に日本汽船(株)笠戸造船所、大正7（1918）年に笠戸島船渠(株)が設立されました。昭和5（1930）年に日本石油(株)下松製油所、昭和9（1934）年に東洋鋼鋳(株)が進出しました。



日本汽船(株) 笠戸造船所

→現在の(株)日立製作所笠戸事業所

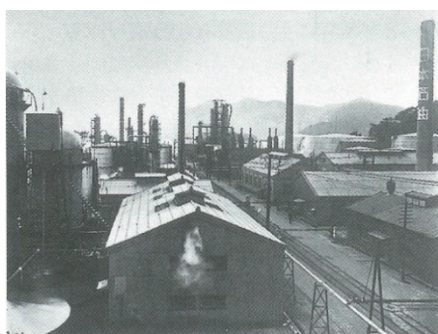
大正6（1917）年、日本汽船(株)笠戸造船所が設立されましたが、鉄鋼不足により機械製造に転換し、機関車製造を始めました。
大正10（1921）年に(株)日立製作所が買収し、笠戸工場と改称しました。



笠戸島船渠(株)（→笠戸船渠(株)）

→現在の(株)新笠戸ドック

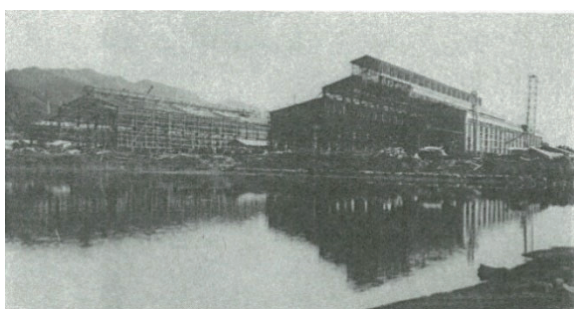
大正7（1918）年に笠戸島船渠(株)が設立されましたが、大正12（1923）年に解散しました。
その後、(株)大阪鉄工所笠戸島工場が引き継ぎ、昭和5（1930）年に設立した笠戸船渠(株)が買収し、造船や船舶の修理を行いました。



日本石油(株)（→日本石油精製(株)）

→現在のENEOS(株)下松事業所

昭和3（1928）年、西日本での製油所建設を計画した日本石油(株)は、下松の塩田跡地に進出することを決め、昭和5（1930）年に開所式を開きました。のちに末武に貯油タンクを整備しました。



東洋鋼鋳(株)

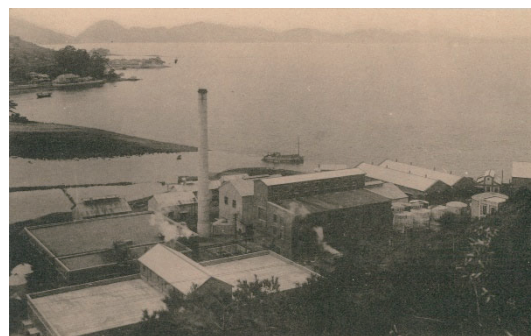
昭和9（1934）年、大阪の東洋製鉄(株)は、当時大部分を輸入に頼っていたブリキを製造するため鋼鋳工場の建設を決め、東洋鋼鋳(株)を設立して下松に進出することにしました。
翌昭和10（1935）年に操業を始めました。

上から、「大正末期の笠戸工場」『日立七十五年の思い出』、「笠戸船渠株式会社笠戸工場」『昭和24年下松市勢要覧』 A
「山口県に完成した下松製油所（昭和5年）」『日本石油百年史』、「建設中の鍍錫棟と圧延棟」『東洋鋼鋳50年の歩み』

工場の進出（徳山・新南陽）

日本精蠟(株)

南満州鉄道(株)は、撫順製油所の副産物である粗蠟を原料にパラフィン等を生産する工場建設を計画しました。昭和4(1929)年に日本精蠟(株)が設立され、併せて旭石油(株)から徳山製油所を取得し、翌昭和5(1930)年に徳山工場として操業を始めました。

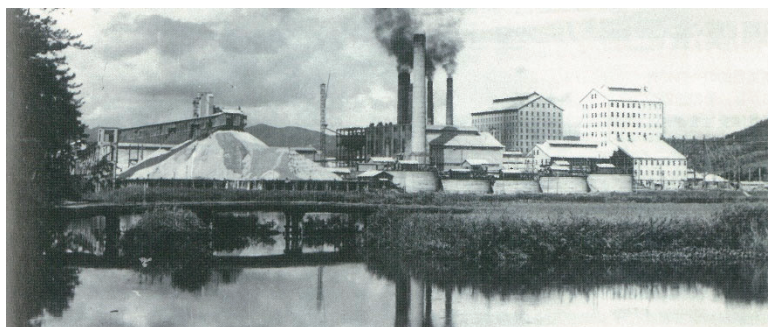


「日本精蠟株式会社徳山製蠟所主要工場」 C

東洋曹達工業(株)

→現在の東ソー(株)

昭和10(1935)年、日本曹達工業(株)を退社した岩瀬徳三郎が、ソーダとセメントの兼営など合理性を追求したソーダ工場を目指して富田町に設立し、翌昭和11(1936)年から操業を始めました。



「創業当初の工場」『東ソー80年史』

<電力と工業用水>

工場の進出と規模の拡大に応じて、電力や工業用水が必要となりました。

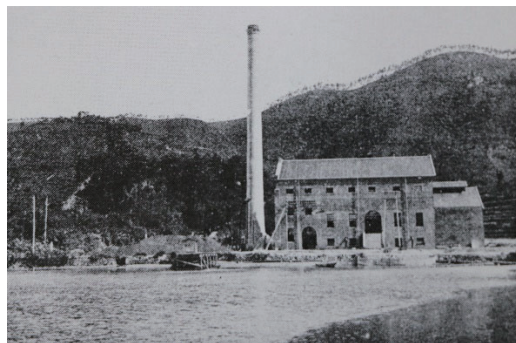
電力については、大正6(1917)年に久原房之介が買収した山陽電気(株)が徳山発電所を建設し、大阪鐵板製造(株)や海軍煉炭製造所、下松に送電を開始しました。

また、明治末頃からは、錦川を利用した発電や工業用水供給構想が生まれ、大正10(1921)年に県営水力発電計画が策定されました。その結果、錦川第一発電所(周南市金峰)が大正13(1924)年に竣工しました。

なお同年、山口県電気局が山陽電気(株)など県内3社を買収して発足したことにより、県営事業として電気の供給が進められました。

また、工業用水については、富田川水系の供給力が限界に近づく中、山口県が河水統制事業として錦川水系の開発を計画して多目的ダム建設を決めました。

昭和15(1940)年に向道ダムが完成して、工業用水の供給を始めるとともに、同年に完成した間上発電所から送電も始めました。



「山陽電気株式会社徳山発電所」『徳山市史』



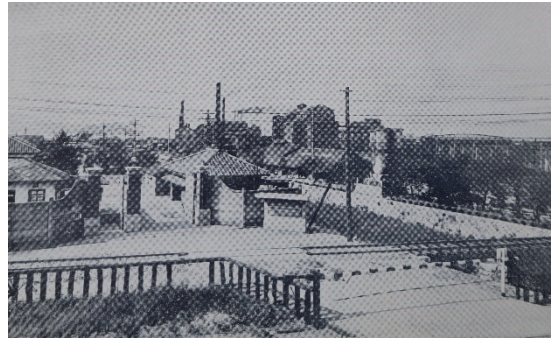
「間上発電所全景」『錦川利水工事記念写真帳』 A

徳山下松港のあゆみ ～ ⑤海軍の港

煉炭製造所から燃料廠へ

第一次世界大戦以降、世界的に石油の重要性が高まり、海軍では国内最大級の製油所を建設することとし、大正8(1919)年にタンク20基(のちに16基増設)などを整備しました。

大正10(1921)年、海軍煉炭製造所を海軍燃料廠へと拡張改組して、製油部では国内産のほかアメリカや南洋方面から原油を輸入して重油などを精製しました。



上：「海軍燃料廠正門」
『徳山(昭和11年)』
A

下：昭和9年「徳山湾に
停泊中の連合艦隊」『徳
山市史』

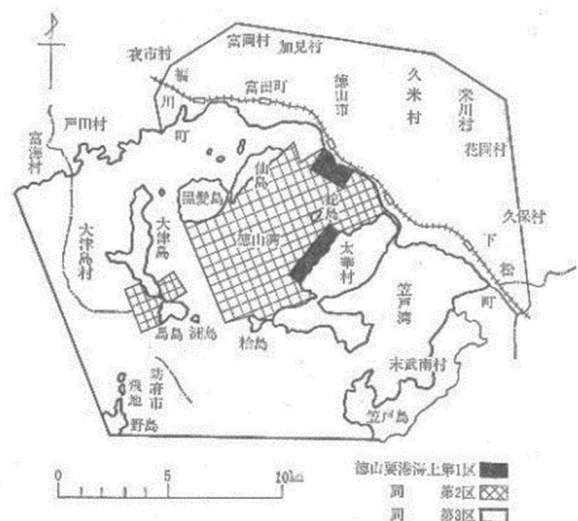


要港指定

昭和12(1937)年に日中戦争が始まり、戦時体制が強まるなか、翌昭和13(1938)年4月1日に、徳山港は海軍要港に指定され、自由な貿易港としての機能が停止されました。

「徳山要港海上区域図」『徳山市史』

指定範囲には、大浦油槽所や昭和12(1937)年に開設された大津島の魚雷発射試験場が含まれています。



光海軍工廠の開庁

昭和12(1937)年、ロンドン海軍軍縮条約の満了により海軍は工廠の新設を計画しました。候補地を比較検討した結果、海岸埋立など港湾設備に関する将来性や、豊富な島田川の水量などを決め手として光に建設することを決定し、昭和15(1940)年に工廠が開庁しました。

徳山下松港のあゆみ ～ ⑥戦災からの復興

太平洋戦争

徳山・下松・光には海軍の工場などが存在したため、昭和20(1945)年5月から8月に空襲を受け、市街地や工場は大きな被害を受けました。

また、周防灘では機雷により艦船が被害を受けたことから海軍が掃海を行い、戦後は海上保安庁が業務を引き継いで継続し、昭和24(1949)年に航行安全宣言が出されました。



「戦災後の徳山市街」『徳山市史』

工場の再開、再開港（下松港の編入）

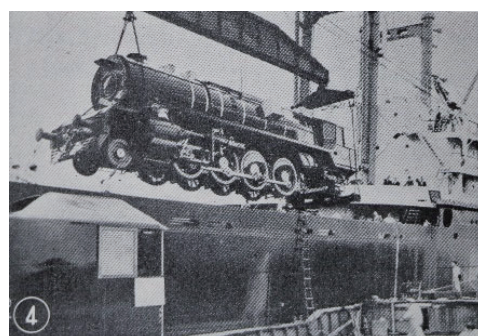
GHQによる日本の非軍事化が進められ、海軍燃料廠や海軍工廠は閉鎖され、民間企業は賠償指定による長期間操業停止や、一時的に異なる製品の生産など、苦しい時期を迎えました。

経済復興を後押しするため、昭和23(1948)年に徳山港は下松港を編入して再開港され、昭和26(1951)年には重要港湾に指定されました。

昭和30年代以降には、工業都市として飛躍的な発展をするにつれて、海外からの原油・原塩などの原材料の輸入や、セメント・ソーダ・石油製品その他工業製品の輸出のほか、国内各地との貨物の運輸が多くなり、各工場関係の海上輸送が活発化しました。

上：東洋曹達工業(株)リーフレット「セメント」(部分) A

下：(株)日立製作所笠戸工場「工場適地の紹介」(部分) A



徳山大博覧会

昭和23(1948)年の再開港を祝うとともに、戦災からの復興を願い開催されました。

市民は日々の生活に追われ、企業は生産再開の途を求めて懸命になっていた当時であって、将来への希望の光を灯しました。

「徳山大博覧会」 B



徳山下松港のあゆみ ～ ⑦高度成長へ

出光興産(株)の進出

昭和30(1955)年、海軍燃料廠の跡地が日本政府に返還され、翌昭和31(1956)年、出光興産(株)への払い下げが決定されました。

出光興産(株)は、昭和32(1957)年に製油所の第一期工事を完成させ、石油の生産を始めました。

その後、大浦地区に貯油タンクを増強するとともに、輸入原油を積載した大型タンカーが入港するため、沖合にシーバースを設置して、海底パイプラインによって貯油タンク、さらに製油所へと原油を運ぶ設備を整えました。

「出光興産株式会社徳山製油所」『戦災復興 1959』



石油化学コンビナートの形成

出光興産(株)は石油化学の将来性に着目し、大規模な石油化学工場建設の構想をもっていました。一方、徳山曹達(株)や東洋曹達工業(株)はソーダ製造法の転換に伴う塩素の活用策として石油化学部門への進出を計画していました。

その頃、徳山市は第4号海面埋め立て事業によって企業用地の確保を図り、昭和39(1964)年に完成した埋立地には、同年に出光石油化学(株)が操業を始め、エチレンやプロピレンなど石油化学基礎製品を生産しました。また、同年に周南石油化学(株)、翌昭和40(1965)年に徳山石油化学(株)も操業を始めたことにより、石油化学コンビナートの骨格が形成されました。

さらに昭和40(1965)年には海軍燃料廠跡地の一部に日本ゼオン(株)が進出し、その周辺では昭和46(1971)年に日本化学工業(株)が操業を始めるなど、多くの工場がパイプラインによって結ばれ、石油化学製品だけでなく電力や蒸気などの供給を受け、製品を製造するようになりました。



※出光石油化学(株)はのち出光興産(株)と合併。徳山石油化学(株)は現在の昭和電工(株)徳山事業所。周南石油化学(株)は解散。

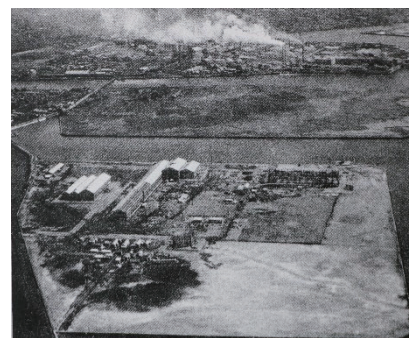
「とくやま 1972」『徳山市勢要覧』

工場の進出（徳山・新南陽）

日新製鋼（株）

→現在の日鉄ステンレス(株)山口製造所周南エリア

昭和3（1928）年に分離した大阪鉄板(株)と徳山鉄板(株)は昭和28（1953）年に合併して日本鉄板(株)となり、昭和33（1958）年に南陽工場を開設、ステンレスの生産を始めました。翌昭和34（1959）年日垂製鋼(株)と合併し日新製鋼(株)となりました。



「建設中の南陽工場」『日新製鋼新発足十年史』

日本ゼオン(株)

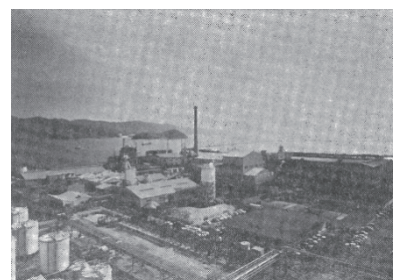
合成ゴムの国産化に成功した日本ゼオン(株)は、合成ゴムの需要拡大に対応して、昭和40（1965）年、海軍燃料廠跡地に徳山工場を建設し、コンビナート各社からパイプラインを通じた密接な需給関係のもと、各種合成ゴムなどの生産を始めました。



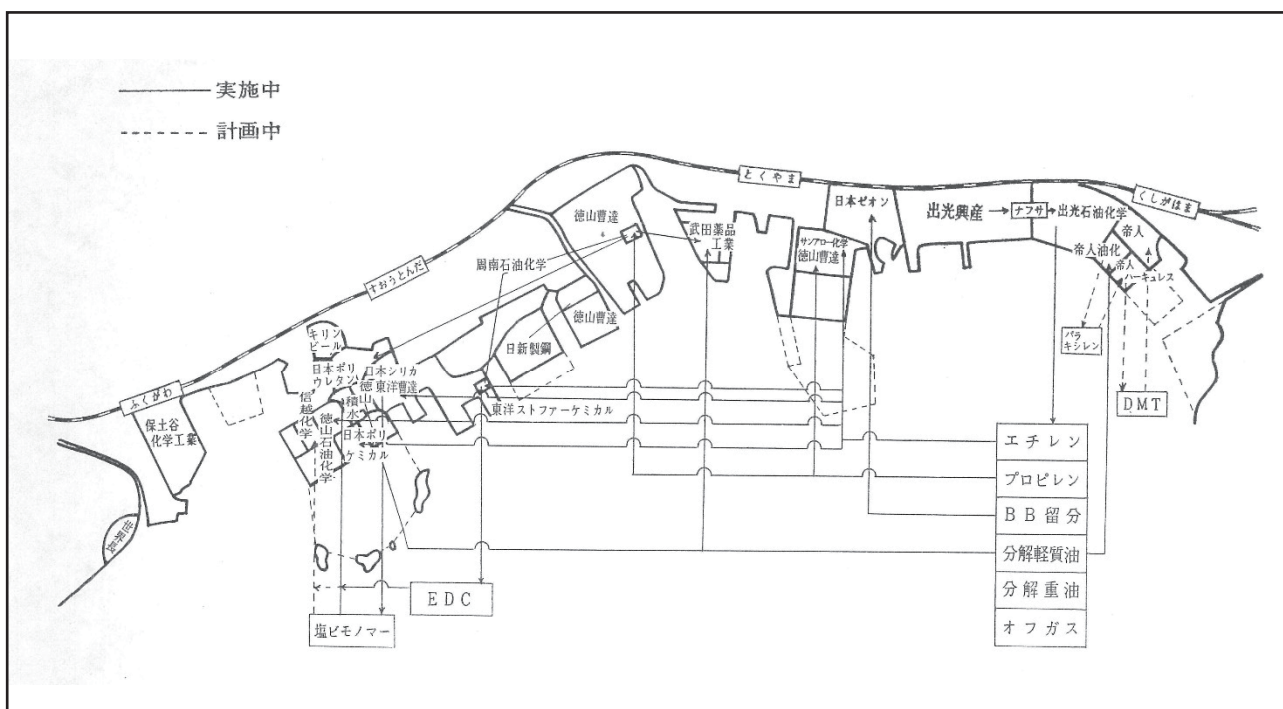
「竣工当時の徳山工場」『日本ゼオン二十年史』

日本化学工業(株)

化学工業薬品や肥料、農薬などを製造していた日本化学工業(株)は、長年蓄積されたクロム製造技術を活かした専門工場として、昭和46（1971）年に徳山工場の操業を始めました。



「日本化学工業」『徳山市史』



「徳山南陽地区石油化学コンビナート位置略図」『徳山市史資料』

工場用地の埋立など

丘陵地の大迫田地区は早くから運動公園などの整備が計画され、昭和36(1961)年度に同地区一帯の土砂を第4号海面埋め立て事業に利用することになりました。

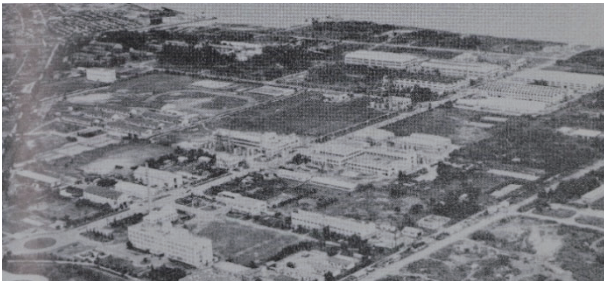
翌昭和37(1962)年、日本住宅公団が周南団地建設計画を決定し、工場用地の造成に加え周南地域の産業を支える人々の住宅供給が図られました(昭和49(1974)年に事業完了)。

また、工場用水の供給対策が急務となり、県は錦川総合開発計画として菅野ダムを建設(昭和41(1966)年完成)することとしましたが、対策は急を要したため、別に富田川総合開発事業として川上ダムを建設(昭和37(1962)年完成)しました。



左:「徳山港区T4号埋立地」「徳山下松港紹介」昭和37年 A
右:「工事現場より徳山湾を望む」「周南団地」昭和42年 A

工場の進出(光)



武田薬品工業(株)

かねてより新工場の適地を求めていた武田薬品工業(株)は、昭和20(1945)年に海軍工廠跡地の転用を申請し、翌昭和21(1946)年に工場を建設しました。昭和22(1947)年には当時必要とされた発疹チフスワクチンの生産を始めました。



八幡製鉄(株)光製鉄所(→新日本製鐵(株)) →現在の日鉄ステンレス(株)山口製造所光エリア

昭和25(1950)年に発足した八幡製鉄(株)は、合理化計画として海軍工廠跡地に最新鋭設備による工場建設を進めました。工場は昭和30(1955)年に操業を始めました。



日本特殊鋼管(株)(→八幡鋼管(株)) →現在の日本製鉄(株)九州製鉄所

昭和33(1958)年に光工場として電縫鋼管の製造を始めました。昭和35(1960)年に八幡製鉄(株)の鋼管部門となって社名を八幡鋼管(株)に変更し、後に八幡製鉄(株)と合併しました。

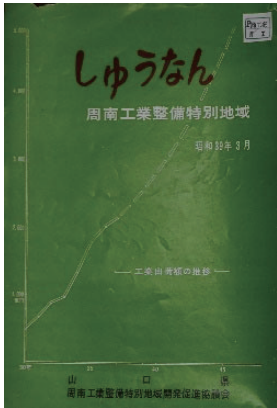
3点とも「ひかり 周南工業整備特別地域」 A

工業整備特別地域への指定、特定重要港湾指定と光港の編入

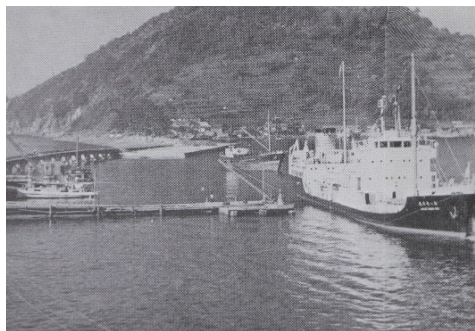
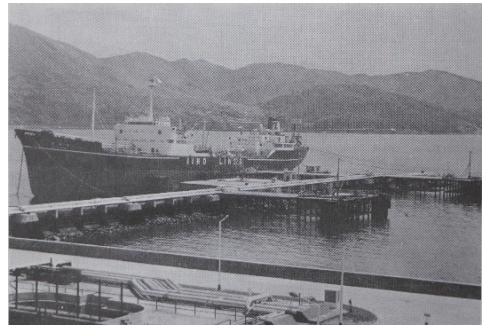
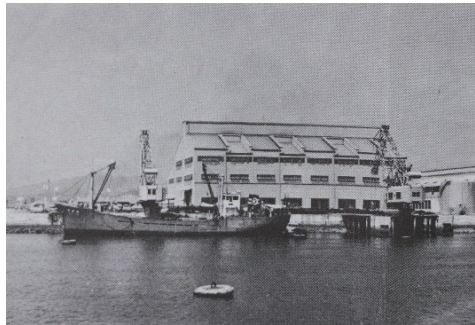
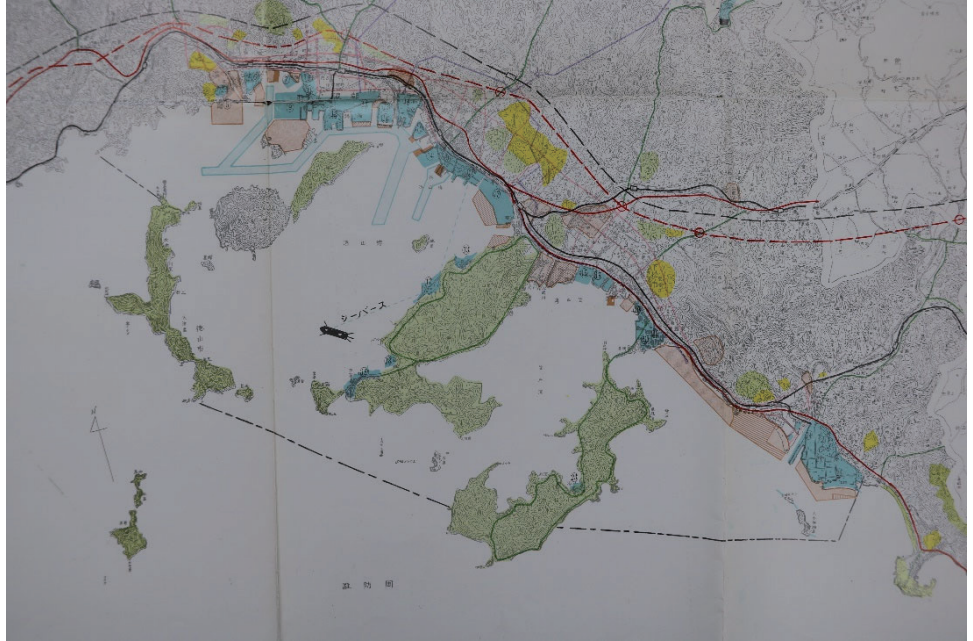
日本経済の高度成長に伴い、国土の均衡ある開発と国民経済の発展を目指し、地方に工業開発拠点都市を整備する政策が取られました。

昭和39(1964)年、徳山・防府・下松・光の各市と南陽町が工業整備特別地域に指定（翌昭和40(1965)年に周辺の市町が追加）され、工業の発展が一層促進されることとなりました。

また、徳山下松港は、昭和36(1961)年に港湾計画が策定され、昭和40(1965)年に特定重要港湾に指定、翌昭和41(1966)年には光港を編入するなど、港湾機能の整備が進められました。



「周南工業整備特別地域
基本構想図」 A



「徳山下松港紹介」昭和37年 A

日新製鋼(株) (上段左)、出光興産(株) (上段右)、
日本精蠟(株) (中段左)、東洋鋼鋳(株) (中段右)、
八幡製鉄(株) (下段) の各社の栈橋

